発掘だより　No.19
平成４年８月８日（土）　豊川市教育委員会 社会教育課 発行

平成4年度　赤塚山古窯跡発掘調査の概要

古くより赤塚山周辺からは、三河国分寺・尼寺と同じ瓦が出土している
ことから瓦窯跡の存在が推定されてきました。

そこで赤塚山公園整備に先立ち、平成２年度及び３年度に範囲確認調査
を実施したところ、赤塚山周辺には瓦窯１基以上と古墳２基以上の存在が
確認され、続けて行なわれた平成３年度の本調査により、瓦窯は２基以上
またその工房跡も存在することが明らかとなりました。

そこで、２ヵ年にまたがる本調査として、今年度は工房跡の東の広がり
を確認するためのＤ地点と瓦窯の確認されたＡ地点の調査を実施している
ところです。

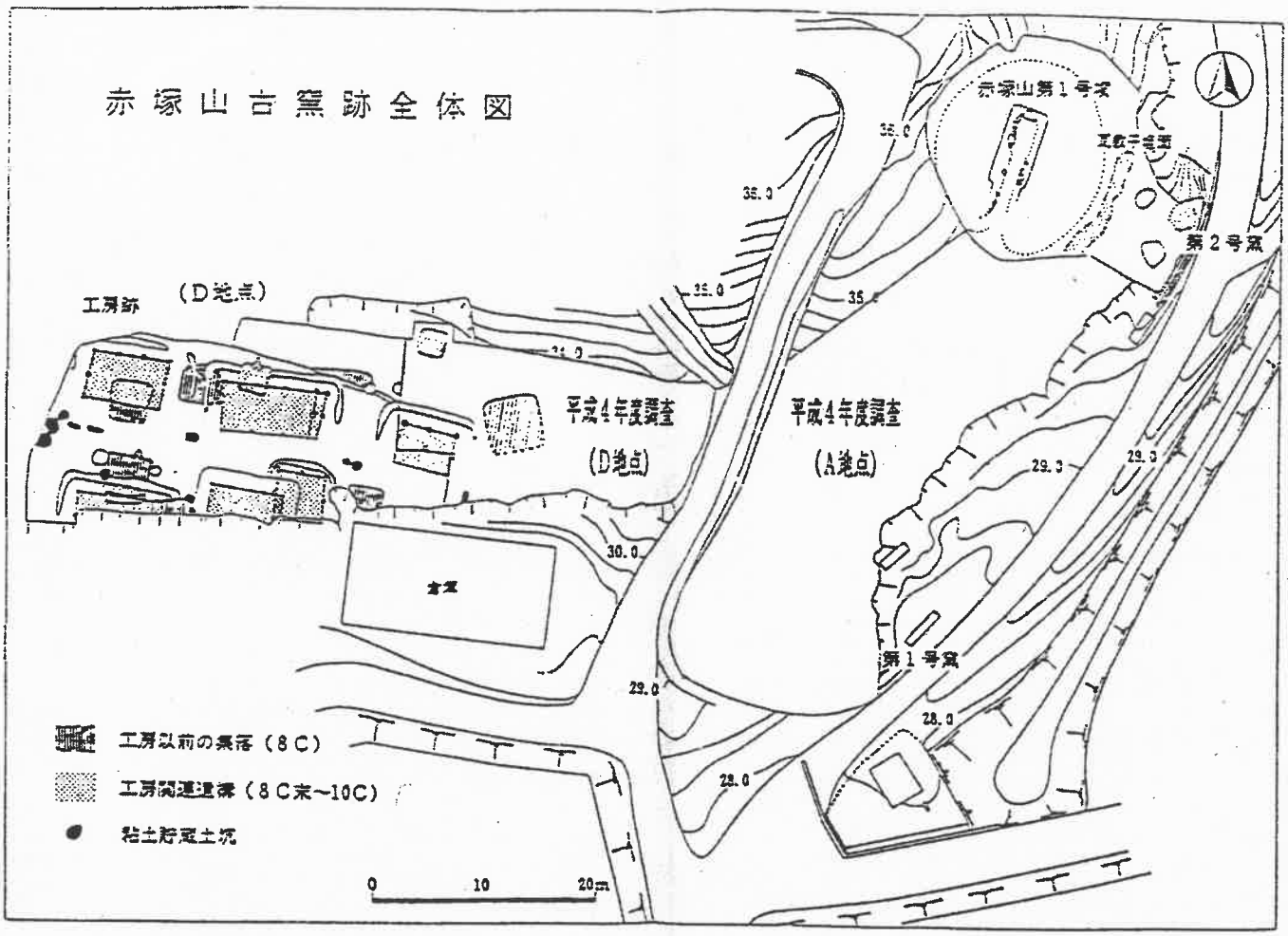
1、平成3年度の調査（発掘だよりNo.１７参照）

（１）　Ｂ地点の調査（赤塚山第１号墳）

平成３年度の範囲確認調査により古墳が１基確認されたため、引き
続き本調査を実施したところ、６世紀末～７世紀初頭頃と推定される
円墳であることが確認されました。

出土遺物としては、前庭部を中心として坏、高坏等の須恵器、また
石室内からは金環（耳環）１対、ガラス小玉約 200個が出土しています。

なお、この古墳は発掘した状態のまま保存してありますので、現在
でも見学できます。



（２）　Ｄ地点の調査（瓦工房跡）

第１号窯の西方約40ｍの崖面に竪穴住居の断面がが確認されたため、調査を行なったところ、山麓の斜面から竪穴住居跡９軒（10世紀代と推定されるＳＨ５を除いた８軒は８世紀後半～９世紀初頭）、掘立柱建物跡６棟、礎石を伴う建物跡１棟、土坑18基（ものうち９基は粘土貯蔵土坑と考えられる）などが確認されました。

これらのことから、Ｄ地点では三河国分寺・尼寺に使用された瓦を製作していた瓦工房跡であることが判明しました。

2、今年度（平成4年度）の調査

（1）　Ｄ地点の調査

平成３年度に調査された瓦工房跡の東側の広がりを確認するために約 400㎡の調査を６月１日から開始し、６月１６日に終了しています

・　確認された遺構

瓦工房に関連すると推定される２間×２間の掘立柱建物跡１棟、８世紀後半から９世紀初頭と推定される竪穴住居跡２軒、粘土貯蔵用と考えられる土坑１基等が確認されています。

なお、この地点より東側には遺構が検出されていないことから、瓦工房としては、平成３年度に調査されたＤ地点が中心部分になるものと考えられます。

※　平成３年度調査分と４年度調査分を合わせた図面を次のページにのせてあります。

・　出土遺物

遺物は以外に少なく、須恵器（すえき）、土師器（はじき）、瓦等コンテナ１箱程度で

（2）　Ａ地点の調査

平成２年度の範囲確認調査によって確認された赤塚山第１号窯の全体像を明らかにするためと、１号窯周辺にどのような遺構があるのかを確認するために、６月１８日から調査を開始し、現在も継続中です。

・　確認された遺構

ロストル式平窯１基（第１号窯）、第１号窯をめぐる排水用と推定される溝１条、瓦を焼くときにでる灰を捨てたと推定される土坑１基、弥生時代後期の竪穴住居跡１軒等です。

ロストル式平窯とは、焼成室内部に熱効率を良くするためと、瓦を焼く台との２つの役目をはたす「うね」（ロストル）が何条もあることから、この名前が付いています。当時窯の形態としては、登り窯が主流をしめていましたが、ロストル式平窯は、瓦を焼く専用の窯として、徐々に普及していったものと考えられます。

赤塚山第１号窯は出土している瓦等から、奈良時代末～平安時代初頭（８世紀末～９世紀前半頃）と推定され、保存状態は非常に良好です。

この窯は、平瓦を積み上げ、その上にスサ入り粘土を貼りつけて構築してあり、かなりしっかりした形で作り上げられているのが確認でき、これは、当時の瓦窯製作の工人の技術の高さを物語るものです。

なお、この窯は操業中に一度大きな補修が加えられていることが確認できます。焼成室奥壁を瓦１枚分（約35cm）縮小して新たな壁を築いており、この理由としては、熱効率が悪く、焼成室を縮小することによって火のまわりを良くするためなどが考えられます。

また、１号窯をめぐる排水用の溝の中には焼き損じた瓦が多数堆積しており、ある時期溝としての機能をはたさなくなり、製品としては使用できないような瓦を捨てたものと推定されます。

・　出土遺物

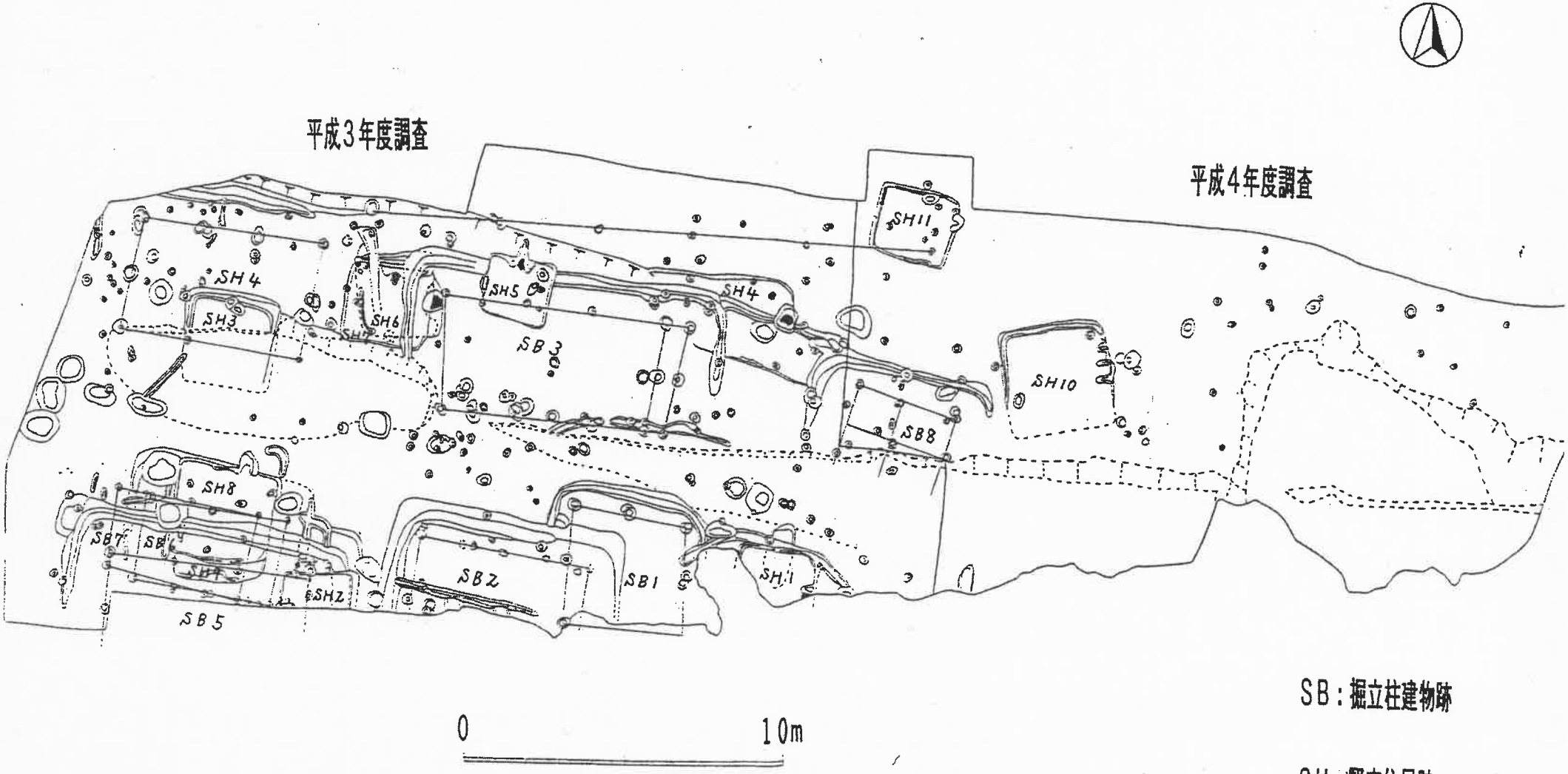
出土遺物の大半は瓦であり、その量は現在でコンテナ30箱を数え、最終的には70箱程度になるものと思われます。

１号窯周辺から出土している軒瓦としては、素弁八弁蓮華文軒丸瓦と飛雲文軒平瓦が多数を占めており、これは三河国分寺・尼寺では葺きかえ用に使われた瓦であることが分かっていることから、１号窯で焼かれた瓦は国分寺・尼寺の補修用であったことが推定されます。

瓦以外の出土遺物としては、１号窯周辺から坏、大甕等の須恵器、土師器が出土しています。

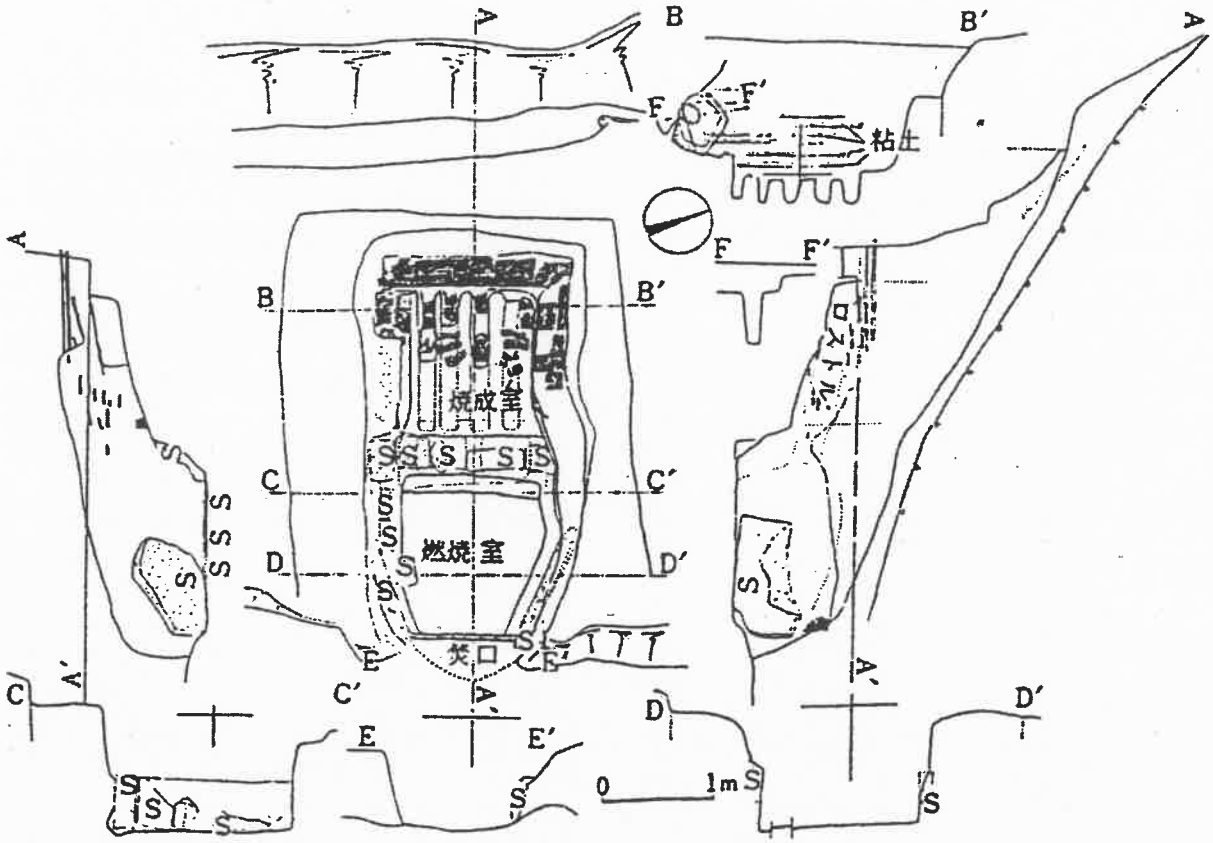
赤塚山D地点（瓦工房跡）遺構平面図

（平成3年度、平成4年度調査分）



SB：掘立柱建物跡

SH：竪穴住居跡



ロストル式平窯ー瓦屋根２号窯（「瓦屋根窯跡」より）

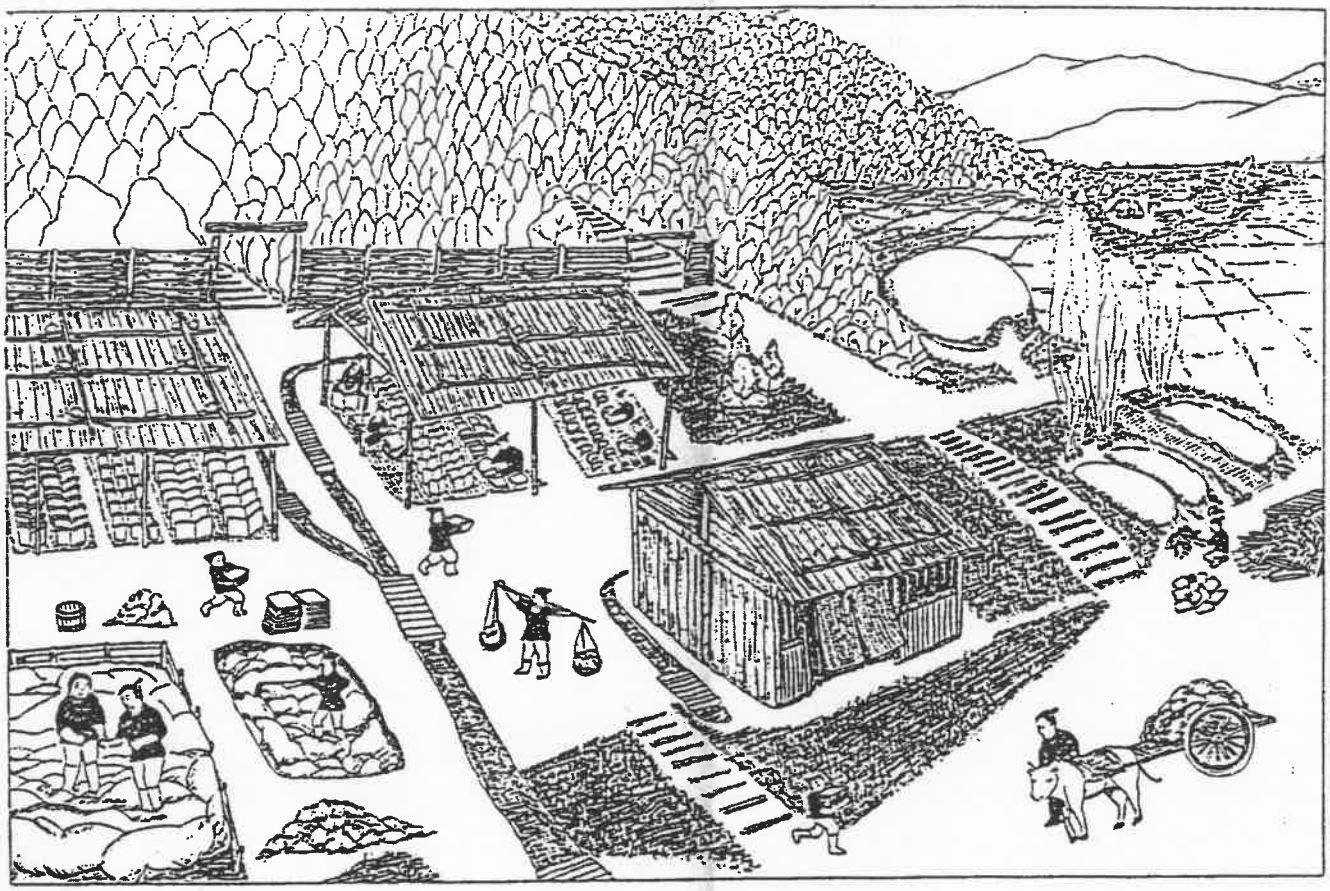
ロストル式平窯の参考例

3、まとめ

ロストル式平窯が確認された例としては、県内では豊橋市~~水神吉窯跡~~市道第1号窯について２例目、また、窯跡と工房跡がセットで確認された例としては全国でも10例ほどを数えるのみです。なお、瓦窯とそこで焼かれた瓦の供給先が分かっている例としては、三河地方唯一のものであり、今回の調査は非常に貴重な発見と言えるでしょう。

今後、遺物整理が進んだあかつきには、三河国の官営瓦工房と三河国分寺・尼寺の実態が明らかにされるものと考えられます。

豊川市では、この遺跡の重要性を考えて、第１号窯と赤塚山第１号墳（平成３年度調査）を赤塚山公園の中で史跡整備をして一般公開する予定でおります。



赤塚山古窯跡復元図

上の図は、発掘調査によって確認されたことをもとにして当時の赤塚山古窯跡を復元した絵です。

この絵を見ると瓦づくりの製作方法がよく分かります。このようにして製作された瓦が、約２km離れた三河国分寺・尼寺まで運ばれ、屋根を飾ったものと考えられます。